

溺愛外科医ととろける寢室事情

プロローグ

「処女かー。俺は無理だな」

その声が聞こえたのは、雨宮なつきがトイレから出た直後だった。

場所は、会社近くの居酒屋チェーン店。時刻は二十二時を回っていた。

ハンカチで手を拭きながら、なつきは声のしたほうを見る。視線の先にあるのは座敷席で、五、六人の男性が酒を片手になにやら盛り上がっていた。

(なんだか聞き覚えのある声……)

覗くつもりは毛頭なく、友人の待つ自らの席に帰る際、たまたま目に入ってしまっただけ。

(え？ あれって、築山課長!?)

そこにいたのはなつきの会社の上司である、築山だった。

築山将志、四十歳。

身長は高く、ジムに通って鍛えていると聞く身体は服の上からでもわかるぐらいに引き締まっている。いつも高級な腕時計と、仕立てのいいスーツを纏っている彼は、その彫りの深い顔も相まって大人の色気を常に醸し出していた。

出世頭で、来年定年退職する部長の後釜は、彼になるのではないかと噂されている。

そんな築山は当然のごとくモテる。毎年バレンタインデーには紙袋いっぱいチョコレートをもらって帰るし、社内では艶聞が絶えない。

そのせいなのか、最近離婚したらしく、築山に本気で想いを寄せる女性社員も多いのだ。実はなつきも、その中の一人だった。

仕事のこと以外ではあまり話したことはないが、二年前から片想い中である。

想い人を思わぬところで見つけてしまい、なつきの胸は高鳴った。

（こんなところで飲んでるんだ！ 会えるなんて今日はついでるかも！ ……でも、だつたらさっきの言葉は築山課長が……）

築山は後輩と飲んでるようだった。見れば、なつきの同期の男性社員もいる。

どうやら、彼らも花金を楽しんでるようだった。

「じゃあ、課長はどんな女性がいいんです？ そう言うことはやっぱり、経験豊富な人がいいんですか？」

輪の中の一人が声を上げる。彼の頬はお酒により赤く染まっており、頭は緩く左右に揺れていた。他の男たちも皆似たようなものである。もちろん築山の顔も赤い。

なつきは柱の陰に身をひそめ、想い人の声に耳を傾けた。

「何事も経験値は高いほうがいいだろう？ 仕事も、恋愛もな！」

「でも、なんか経験豊富な人って過去の男の影がちらついて嫌じゃないですか？ 遊んでる感じも

しますしー」

「ばーか。そんな風に思うのは、お前らの経験が足りないせいだよ。大体、処女の地味女なんてつまらない奴ばかりだぞ！ うちの会社にも何人かいるが、ああいう女は嫉妬深し、束縛してくる奴も多いからな！」

築山の言葉に部下たちはへえー、と感心したように頷いている。

「それに、ベッドの上で奔放に振る舞う女ほど、いい女はいねえだろ？」

「そういうことを言っただけだから、奥さんに逃げられるんですよー」

「余計なお世話だ！」

どつと笑いが起きる。

皆、お酒を飲んで相当羽目を外しているようだった。

築山も、会社での雰囲気とはずいぶん違った印象を受ける。

会社での築山はいつもクールで何事にも動じず、笑う時も優しく微笑むような人だ。こんな風には大声を上げるところも、馬鹿笑いするところも見ることがない。

「とにかく！ 俺は処女や地味女は絶対に相手しない！ 付き合うなら、それなりにいい女じゃないと、時間も金も、もつたいねえからな！」

「うわー！ その台詞、言ってみてえ!!」

「さすが築山課長、ばねえっす！」

（ど、どうしよう）

築山の台詞に、なつきはボディプロを食らったような気分になった。青い顔で、頬を引き擡たげている。

そうして、身をひそませた柱の陰からふらりと出ると、見つからないように気配を消しながら、とぼとぼと歩き出す。

——なつきがショックを受けているのには理由があった。

なにを隠そう、雨宮なつきは二十六歳で処女なのである。

ついでに言うと、自他共に認める地味女でもある。

性格は大人しく、フリーになった築山にアピールするどころか声をかけることも、できた試しがない。

上司に怒られれば、なにも反論できず、あわあわと頭を下げるばかりだし、嫌な同僚にはマウントを取られてばかりだ。

服装も全体的にシンプルで、色もグレーやブラウンなど無難ぶなんな物が多い。

恥はずかしいから露出も最小限で、膝丈よりも上のスカートは穿はいたことがないし、化粧も薄く、髪の毛も目立たない程度にしか染めていない。

つまり纏まとめると、雨宮なつきは築山の求める『派手で、経験が多く、ベッドの上で奔放ほんぱうな女性』とは真逆の人間なのである。

なつきは血の気が引いた顔で、友人の待つ席に戻った。

正面には、彼女の顔色を見て眉根を寄せる友人が座っている。

「どうかしたの？ 飲み過ぎて吐いちゃった？」

なつきは無言のまま緩く首を横に振る。

そんな時、友人が呼んだであろう店員が二人のところにやってきた。

「なにかご注文ですか？」

「えっと……」

「すみません。日本酒冷やでお願いします」

友人の声を遮さえぎって、なつきが声を上げた。

その様子に、友人は目を丸くする。

「ごめん、トモちゃん。やけ酒、付き合っつて！」

なつきの潤うるんだ瞳に、トモと呼ばれた友人は「仕方ないわねえ」と笑うのだった。

冬にもかかわらず、肩を丸出しにしたオフショルダーのニットに、屈めば下着が見えてしまいそうな短さのスカート。タイトは薄く、肌の色がぼんやりと透けて見えている。唯一防寒性がありそうなのは、その上から履いているニーハイのブーツだけ。

普段、下ろしているだけの髪の毛は緩く巻いてあり、化粧はいつも数段濃かった。唇なんて、まるで血を吸った後の吸血鬼のように、真っ赤なルージュがひかれている。

築山の好みを知り、やけ酒を呷ってから一週間後。なつきは自身の格好に居心地の悪さを感じながら、道の端を歩いていた。

大きな瞳には、羞恥による涙が溜まっている。

「そんなに恥ずかしくがらなくても大丈夫だって！ 私が見立てたその服、すごく似合ってるわよ！化粧だって、たまにはそういうのも新鮮でいいじゃない！」

道の真ん中を堂々と歩きながら、トモは励ましてくれた。

彼女もなつきに負けず劣らず派手な格好をしているが、堂々としている。

なつきは電信柱の陰に隠れながら、震える声を絞り出す。

「や、やっぱり帰る！ 合コンとか無理っ！」

「えー。当日キャンセルは、さすがにまずいって！ 相手の男共は別にいいとして、女の子も呼んでるんだよ？」

「それでも無理なものは無理！ しかも、こんな格好で行くなんて……」

「だから、似合ってるって言ってるじゃない」

トモの呆れたような視線を受けながら、なつきは首を横に振る。

「似合ってる、似合ってるない云々もあるけど、私が恥ずかしいの！ トモちゃんだって、真っ裸で合コンなんて行けないでしょ？ 私にとつてこの服は、裸も同然なんだって！」

「いや、全然違うと思うけど……」

そもそも裸で出歩けば、恥ずかしい以前に公然わいせつ罪でお縄になってしまう。

トモは電信柱と一体化しそうな友人を眺めながら、頬を掻いた。

「そもそも、なつきが『誰か私を築山課長の好みに変えてくれる人いないのー！』って嘆くから企画した合コンなのに！」

「あれは酔った弾みで言っちゃっただけで、本当はそんなこと……」

先週、やけになって浴びるように酒を飲んだ日。なつきは酔った勢いで、トモに築山のことを相談していた。

その時に飛び出したのが『誰か私を築山課長の好みに変えてくれる人いないのー！』という発言だ。

高校からの付き合いであるトモは、なんでも相談できる数少ない友人の一人。

そんな彼女が親友のために一肌脱いで、この『合コン』をセッティングしてくれたのだ。

しかし、なつきは『合コン』も『派手な服装』も苦手なのだ。

「合コンだって意識するから緊張するのよ。普通の飲み会だと思えばいいの！ なつきだって、会社の飲み会とかは普通に参加できるんじゃない？」

「まあ……」

「それなら大丈夫だって！ ほら、行ってみたらなにかが変わるかもしれないし！」

「でも、私には好きな人が……」

もじもじと恥ずかしがりながら俯くなつきを、トモは一刀両断する。

「その好きな人に相手にされないから、自分を変えたいって話だったんでしよう？ 露出が多い服も着れない上に、合コンくらい行けなかったら、どうやっても派手な女にはなれないわよ！」

「うぐっ！」

思わず胸を押さえてしまうなつきである。

親友の言葉が容赦なく胸を抉る。

トモは電信柱に隠れているなつきの手を取った。

「ま、今日は自分の殻を破るための第一歩だと思って参加すればいいわよ！ 私もアンタが地味すぎるの、少しもつたないって思ってたし！ ほら、足を動かして！」

「うう……」

そのまま引きずられるように、なつきは合コン会場に連れて行かれた。

（なんか、私だけ場違い感がすごい……）

なつきは合コン会場で、隅に身を寄せながらお酒に口をつけていた。

集まったメンバーは、やはり全体的に派手な人が多く、皆お酒の勢いもあって盛り上がっている。

なつきも格好だけはそれなりに派手だが、一人だけテンションが低かった。場の空気を壊さないように受け答えはするが、それだけである。

（お酒が美味しいのが唯一の救いだな！）

一人でちびちびとお酒を飲みながら、盛り上がる人たちをぼーっと眺める。

会場である『B B』は新宿の地下にあるお洒落なバー。

なつきたちがいる個室は店の中でそこだけ少し趣が違い、部屋から一步出れば大人の雰囲気漂う、落ちついた酒場になっている。

（できれば、あつちで飲みたかったな。まあ、また今度来ればいいか）

お酒は強くないが、嫌いではない。お酒の美味しいお店を見つけたという点に関しては、この飲み会も別に悪いものではなかった。

そんな風に呆けていると、突然、誰かに手を握られた。

「雨宮さん大丈夫？ 楽しんでる？」

隣に座った男性が、へらりとした笑みを浮かべる。

名前はなんだっただろうか。上手く思い出せない。

男の発する強い酒の臭気が鼻につき、なつきは思わず少し眉根を寄せた。

「雨宮さんって、こういう場所苦手なの？ よかったら二人でこの後、抜ける？」

その下心丸出しの笑みに寒気を覚えながら、なつきは笑顔で「大丈夫です」とだけ返した。握られた手をやりわりと退け、男性から少し距離を取る。

男性との触れ合いは、あまり得意なほうではなかった。こういうお酒の場では、特に。

冗談と本気の境目がわからないし、上がりすぎたテンションについていけないからだ。

「雨宮さんって、染まってる感じが可愛いよねー」

「はは……。そうですかね？」

「そうそう！ 食べちゃいたいぐらい！」

「はあ」

「ちよっと！ その子あんまり男の子に免疫ないんだから、ぐいぐいいくのやめてっ！」

見かねたトモが男性を止める。すると、男はまるで子供のように声を上げた。

「えー！ いいじゃん、別にこういう場なんだし！ 無礼講！ 無礼講！」

「無礼講の意味、はき違えてない？」

「ははは！ トモちゃん言うこときついー！」

「アンタが失礼すぎるのよ」

男の会話の相手がトモに移ったことを確認して、なつきは胸を撫で下ろした。

（でも、築山課長の好みって、こういう場を楽しんじゃうような女性なんだろうなあ……）

グラスの中の氷をマドラーでかき混ぜながら、なつきは築山の言葉を思い出す。

『とにかく！ 俺は処女や地味女は絶対に相手しない！ 付き合うなら、それなりにいい女じゃないと、時間も金も、もつたいねえからな！』

あの時の声が蘇り、なつきは大きくうなだれた。

（性格なんてすぐ変えられないし、私だって好きで今まで処女だったわけじゃない……）

しかも、単に経験があるだけではダメなのだ。

築山の好みになるためには『ベッドの上で奔放に振る舞う女』にならなくてはならない。

（もうほんと絶望的かも……）

越えるべきハードルが多すぎる。

お洒落や派手な行動はトモに師事すればいいが、さすがに夜のことまでは教えてくれないだろう。

しかし、処女を捨てるためにその辺の男を引っかけるなんてことはしたくないし、だからと言って下心丸出しで手を握ってきたような隣の男もごめん。

それに、実はなつきの脱処女のハードルは、人よりとてつもなく高い。

——体質的に……

（築山課長、諦めないといけないのかな……）

なつきは憂鬱な気分を押し流すように、目の前にあったお酒を呷った。

「あ、雨宮さん、それ！」

「罰ゲーム用のウォッカ！」

「へ？」

声を発した瞬間、視界が歪み出す。

自分の持っているグラスが自分のものではないと気が付いたけれど、もう遅い。

(これ、やばいかも……)

胃がひっくり返るような感覚を味わい、なつきは口を押さえ、慌てて立ち上がった。そして歪む視界の中、急いでトイレに駆け込んだ。

(最悪……)

トイレの縁に手をかけながら、なつきは口元をハンカチで拭いた。

先ほど食べたものだけでなく、昼間に食べたサンドイッチまで、胃の中にあるものすべてを吐き出してしまったようだった。

にもかかわらず、まだ胃がぐにやぐにやと変な動きをしているのがわかる。

少しでも油断すると、また胃液を吐き出してしまいそうだ。

「なつき、大丈夫？」

戸を隔てた向こう側からトモの声がして、なつきは顔を上げた。

「うん、大丈夫。ちょっと気持ち悪いだけだから。トモちゃんは戻ってて。私も落ちついたら戻りから」

「でも……」

なつきが合コンを楽しんでいないというのが伝わっていたのだろうか、トモの声はどことなく落ち込んでいる。

なつきは今出せる精一杯の明るい声を出した。

「大丈夫だって。吐いたらスッキリしたし、気にしないで戻って！　すぐ追いかけるから！」

「……わかった。なにかあったらすぐに連絡しなさいよ」

「うん。ありがとう」

トモが去って行く気配を感じ、なつきは息をついた。

吐いたからか、先ほどよりはずいぶん楽になっている。酔いもすっかり醒めてしまった感じだが、だからと言ってあの会場に戻るのには気乗りしなかった。

隣に座るセクハラ男も好きにはなれないし、皆が騒いでいる場に、居たたまれない気分のまま長くいたくはない。

なつきはトイレから出ると個室には戻らず、カウンター席に座った。カウンターの向こうではバーテンダーがカクテルを作っている。

店内は暗く、足下のフットライトとカウンターを照らすブラケットだけが店内をオレンジ色に染めていた。

合コンの会場となっている個室とは、がちりとした扉で仕切られているし、店内はこの明るさだ。隅に座っていれば合コンメンバーにバレることはないだろう。

(ちよっとだけ休んでから戻ろう……)

そう思っていると、バーテンダーがなつきを見て優しく声をかけてくれる。

「なにか飲む？ 気持ちが悪いらソフトドリンクもたくさん用意しているけど」

「じゃあ、オレンジジュースください」

なつきの注文にバーテンダーは頷く。

しばらくして出てきたオレンジジュースに口をつけ、なつきは身体の力を抜いた。疲れ果てていた胃に、ほどよい酸味と甘みが染み込んでいく。

ほっと息をついた時、斜めうしろから声がかかる。

「こんばんは」

「え？」

振り返ると、そこには一人の男性がいた。

すらりと高い身長に、通った鼻筋。中性的で整った顔つきだが、輪郭はしっかりと男性のそれである。細められた目は涼やかで、全体的に爽やかな印象を受ける。

手にはカクテルのグラスが握られていた。

「隣いいかな？ 一人で寂しく飲むのも飽きちゃって」

「ど、どうぞ」

断るのもおかしいと思いついたところ、彼は少しも遠慮することなくなつきの隣に腰掛けた。

その瞬間、柑橘系のオーデコロン^{かんきつ}の香りがふわりと香る。

「個室にいた子だよね？ こんなところで飲んでいいの？」

「実は、ちよつと戻りづらくて……」

苦笑いで答えると、彼は「そっか」と笑ってくれる。

「じゃあ、もし君が嫌じゃなかったら、戻りたくなるまで俺の話し相手になってくれないかな？ さつきも言ったように、一人で飲むのも飽きちゃって」

「……私でよければ……」

「ありがとう」

薄い、形のいい唇が緩く弧を描く。

カクテルを飲む彼の横顔を眺めながら、なつきもふたたびオレンジジュースに口をつけた。

(女慣れしてる人だなあ……)

そうは思ったが、不思議と嫌な気分にならなかった。

彼は隣に座ってはいるものの、なつきとはそれなりの距離を保ってくれている。合コンで隣に座った男のように、強引に詰め寄ってくる雰囲気は一切なかった。

それに、彼の話すトーンは落ちついていて、聞いていると気持ちが安らいでくる。

「えっと、名前を聞いてもいいかな。俺はレイって言っただけど」

彼はカウンターに指先で『怜』と書く。

「私は、雨宮なつきって言います。降る『雨』に、宮城の『宮』。『なつき』はひらがなです。……

えっと、怜さんって呼んだらいいですか？」

「好きに呼んでいいよ。ところでさ、今日は合コンでもしてたの？」

どうしてわかるのだろうと、なつきは目を瞬かせた。
なつきの驚いた表情を見た怜は、ふっと相好を崩す。

「あの部屋、なんだかすぐく盛り上がりつつたからね。この店、結構防音はちゃんとしてるはずなんだけど、ドアの近くを通つたら、はしゃいでる声が聞こえたからさ」

怜はドアのほうに視線を向ける。

自分が大声を上げていたわけではないが、騒いでいたのを聞かれていたのは恥ずかしい。

なつきは顔を熱くし、困りながら頬を掻いた。

「はは……うるさくしてしまって、すみません」

「謝らなくてもいいよ。うるさかったってほどでもないしね。それに、なつきちゃんは騒いでないでしょう?」

「へ?」

「合コンとか、あんまり好きそうじゃないもんね」

見透かしたような言葉に、なつきは「わかりますか?」と苦笑した。

「そうだね。皆で部屋に入っていく時も今も、『こういう場に慣れてません』って風に見えたし。……格好はとつてもセクシーだけどね」

怜はグラスの縁をなぞりながら、微笑んでる。

部屋の暗さも相まって、その笑みはどこか妖艶だ。

見入ってしまいそうになったなつきは、慌てて顔を背けた。

魔性ななにかに魅了されてしまったかのように頬がじわりと熱くなる。

その頬の熱をごまかしたくて、無理やり明るい声を上げた。

「ほんと、私ってダメですよー。二十六歳にもなって、ああいう場が苦手とか! 本当に子供っぽいというか、地味っていうか……。自分が嫌になります……」

声と共に身体が小さくなっていく。

落ち込んだように溜息をつくなつきを見つめながら、怜は長い指で自身の顔の輪郭を撫でた。

「必要に迫られてないなら、苦手は苦手のままでもいいんじゃないかな」

「でも、このままじゃ築山課長の好みには……」

「つきやま?」

ポロリと零れてしまった想い人の名前に、怜がわずかに反応する。

なつきは羞恥で全身が熱くなるのを感じた。

そして、なぜか取り繕うように声を上げてしまう。

「あ、あの! 実は好きな人がいます! その人が築山っていうんですけど! 彼の好みっていうのが、私とは真逆の派手な女性みたいで……。だから、その、頑張っって直したいなあって……」

「まあ、そういうこと言っけていても、実際に好きになる女の子は純情な子って男も多いし、気にする必要はないんじゃないの?」

「そうかもしれないんですけど、問題はそれだけじゃなくって……」

「それだけじゃないって?」

そう問われて、はっとした。

自分が相談しようとしていた事柄の恥ずかしさに気が付き、全身が強張る。ほんのり熱を持っていた顔が、発火しそうなほど熱くなった。

(なに『処女なのが悩みなんです』って言いそうになってるのよ！ 私っ！)
なんとかごまかそうと、なつきは震える声を出す。

「あ、あの……、えっと……」

「言いたくないことなら無理に言わなくてもいいよ。俺と君は今日知り合ったばかりだしね。今日を過ぎたら、ふたたび会うかどうかかわからない関係だし」

動揺をくんだかのような優しい言葉に、なつきは胸を撫で下ろす。

落ちついてきたなつきを横目で見ながら、怜は今までで一番優しい笑顔を向けた。

「でも、そういう相手って、仲の良い友人には言いにくい悩みを相談するにはもってこいだと思うよ。気兼ねがないし」

「……怜さん」

「俺もお酒を飲んでるからね。大体のことは明日には忘れちゃう予定」

だから遠慮なく話して。と暗に言われ、なつきは胸が軽くなった。

確かにこういうことを相談するのならば、男性がいいだろう。

けれど、なつきにはそういうことを相談できるような男友達はいない。

彼の言うとおりに、なつきと怜は今後会うかどうかかわからない関係だ。だから、ふたたび会っ

た時の気まずさを気にすることなく相談できるだろう。

(相談、してもいいのかな?)

窺うように彼を見上げたところ、怜は一つ頷いてくれる。

「あ、あの、引いちゃうかもしれないんですけど……」

なつきは消え入りそうな細かい声で、築山の好みと自分が処女であることを怜に相談したのだった。

「『派手で、経験が多く、ベッドの上で奔放な女性』ねえ……」

話を聞き終えた怜が少し考えながら顎を摩る。

なつきは、その隣で縮こまっていた。

「やっぱり男の人って、そういうの無理な人はどうやって無理なんですかね?」

「処女かどうかってこと?」

なつきは何度もこくこく頷く。

「どうだろうね。虚勢を張ってそういうことを言うだけの男もいるし、一概には言えないけど。でも、女性のハジメテを面倒くさいって言う人は一定数いるよ。同じように経験豊富な女性がいいっていう男も」

「や、やっぱり……」

なつきの周りの空気だけが、ずーんと重たくなる。

怜はそんなことまったく気にならないのか、平然とした顔で手元のカクテルを一口飲んだ。

「派手な格好とか、性格とかは私でも、本当にすっこすっこ頑張ったらなんとかなると思うんです！……でも、そういう経験だけは……」

「言い方が悪いかもしれないけど、初体験を済ませたいってだけなら、方法はいくらでもあるんじゃない？ それこそ、合コンの中で適当に男を見繕うとか。なつきちゃんなら、別に苦労せずそういう相手を見つけられると思うよ？」

「……それが、無理なんです……」

肺の空気をすべて吐き出すような溜息をつき、なつきはカウンターに額をつけた。

「私、男性とそういうことができない体質なんです」

「と言おうと？」

「眠っちゃうんです」

「眠っちゃおう？」

「そういうことをしようとすると、途中で相手が眠っちゃうんです!!」

なつきはわつと声を上げ、顔を覆った。

——そう、なつきの困った体質というのは『一緒に布団に入った人物が、必ず寝てしまう』というものだった。

「今まで何人かの人とお付き合いたことがあるんですけど、どの人も私と同じ布団に入った瞬間、すぐ寝ちゃって！ 男の人だけじゃなくって、女友達もペットの犬も猫も小鳥もハムスターも！

みんな一分もかからずに寝ちゃうんです！ 修学旅行なんて、私の部屋だけ全員即寝ですよ！」

なつきの荒れた様子に、怜は目を瞬かせた。

驚く彼に構わず、なつきは鼻を吸り、言葉を続けた。

その目の端には涙が光っている。

「私の体質が原因で、毎回彼氏とは上手くいかなくなって別れちゃうし。修学旅行も、高校生ぐらいから、あからさまに同じ部屋になるのを避けられて……。挙げ句の果てには『眠らせ姫』なんてあだ名までつけられたんですよ!? ……私、なにか眠たくなるような成分でも分泌してるんですかね」

「うーん、それはないと思うけど。でも、その原理だと、君と築山って男の人が付き合えたとしても、結局別れちゃうんじゃないの？ だったら無理して自分を変えようとか思わなくても……」

「……でも、築山課長だけは違ったんです」

「違う？」

怜はなつきの言葉を繰り返す。

彼女は頬を引き上げ、照れ笑いを見せた。

その顔は恋する女のそれだ。

そして大切な思い出を記憶から引き出し、胸に手を当て、目を瞑った。

「去年の社員旅行で私、湯あたりで倒れちゃったんです。その時に、築山課長が部屋まで運んでくれて、私が眠るまで添い寝を——あの時の課長は本当に優しくして……。なんと築山課長は寝なかつ

たんです！ 私の隣に添い寝しながら、ずっといろいろ話してくれて……」

うっとりと思をつきながら、なつきは頬を熱くする。

怜は話を聞き、椅子の背もたれに背中を預けた。

そして、腕を組む。

「つまり、君は相手を眠らせてしまう体質で、唯一想い人にはそれが効かない。けれど、相手の女性の好みがあったく自分と合わないから困ってるってわけだ？」

「はい。というか、私の体質に抵抗できる人って築山課長しかいないのに、彼は処女がダメとか、本当に絶望的で……」

ふたたび、なつきの目尻に涙が浮かぶ。

怜はその涙を彼のハンカチで拭い、訝しげな声を出した。

「正直言うと、にわかには信じられないけどね。その築山って人が特別なんじゃないかって、今まで君が関わってきた人たちが例外だったんじゃないの？」

「信じてもらえないってわかってます。初めて話した人は、皆変な顔しますし。……でも、本当なんです」

彼から受け取ったハンカチを目に当てながら、なつきは声を落とす。

怜は真剣な表情で、なにかを考えているようだった。

しばらく沈黙が続き、なつきが飲み物のおかわりにウーロン茶を頼んだところで、ようやく怜が口を開いた。

「……それが本当なら、好都合だな」

「え？ 今なにか言いまし……」

「あつ、兩宮さん！ いた！」

怜の呟いた声に、なつきが反応した瞬間だった。彼女の声を遮るように背後から声がかかったのは、二人は同時に振り返った。

そこには、合コンでなつきの隣に座っていた男の姿がある。

どうやら、いつまで経っても帰ってこない自分を心配して探してくれていたようだった。

男は怜の存在にぎよっとしながらも、なつきの側まで歩いてくる。

「どこ行ってたの？ 探したんだよ。ほら、そっちで飲んでないで戻ろう！ 皆、待ってるよ」

いきなり手を取られて、なつきは目を丸くした。ぞわぞわとした悪寒が背中を走る。

なつきは決して男性が苦手ということは無いのだが、下心を隠すことなく近付いてくる男は、どうしても警戒してしまう。

なつきは男の手をやりわりと振り払い、椅子から立ち上がり、距離を取った。

「ごめんなさい！ 少ししんどくて、もう帰ろうかと思って……」

「そうなんだ！ それなら家まで送るよ」

「えっと……」

気分が悪いという女性を前に、嬉しそうに笑う目の前の男が信じられない。嫌悪感がじわじわと

這^はい上がってくるが、上手く断る方法が思いつかない。

なつきがまごまごしていると、ふたたび男が手を伸ばす。

しかし、その手がなつきに触れることはなかった。

触れる前に、別の男性がなつきを引き寄せたからである。

「残念。彼女は俺が送ることになってるんだ」

「へ？」

「は？」

見上げると、怜がなつきの肩をしっかりと掴^{つか}んで自分のほうへ引き寄せている。

突然の行動に、なつきは言葉を失ってしまった。

「ほら、行こう」

「え？ なん……」

「いいから合わせて」

甘い声で囁かれ、反射的に頷いてしまう。

「横から取ったみたいで、悪いね。じゃ」

なにが起こっているのかわからないまま、なつきは怜に連れられて店を後にした。

しばらく、恋人のように肩を引き寄せられて歩き続けた。

十二月に入ったこの時期の街並みは、クリスマスを意識して赤や緑や白の電飾でライトアップさ

れている。

粉雪がチラチラと舞う中、なつきはいまだに自分の肩を離さない怜を見上げた。

「あの、先ほどはありがとうございました」

「別に大したことはしてないよ。これぐらいで諦^{あきら}めてくれる人でよかったね」

「あ、はい」

なつきは一つ頷いた。

——あの時、とっさの判断で怜が連れ出してくれなかったら、なつきは言われるがまま、部屋まで付いてこられたかもしれない。間違っても一夜を共に……なんてことはなかったと思うが、無理やり迫られた可能性はある。おそらく相手は行為前に眠^ねってしまうだろうが、心に深い傷を負っていただろう。

こうやって無事に帰れているのは、ひとえに彼が機転をきかせてくれたおかげだった。

(相談にも乗ってくれたし、助けてもくれたし。怜さんって本当に優しい人だな。最初『女慣れしてそう』とか、失礼なことを思っごめんさい)

つい一、二時間ほど直前のことを思い出しながら、なつきは心の中でそう謝った。

初対面なのに、彼の厚意に甘えてばかりである。

「相談も聞いてもらっちゃいましたし、このお礼はいつかちゃんと言いますね！ ……と言っても、できることは少ないですが……」

なつきにできることと言えば、精々なにかを奢^{おご}ったりするぐらいだろう。しかも、しがないOL

の身だ。大したものは奢れない。

それでも精一杯のことはしますよ！ とやる気に満ちた瞳で訴えたところ、怜は少し驚いた表情を浮かべた後、なつきを覗き込んできた。いきなり迫ってきた彼の顔に、なつきは狼狽える。

「あ、あの……」

「それならば、俺、困っていることがあるんだけど、ちょっと手伝ってくれない？」

「あ、はい！ 私にできることなら、なんでも言ってくください」

「……なんでも？」

「え？ ……は、はい」

念を押すように聞かれて、なつきは少し戸惑いながらも頷いた。

すると、怜は口元を押さえて笑い出す。

「築山って人のことを聞いた時も思ったけど、なつきちゃんって男見る目ないでしょう？」

「ええ!？」

「それとも、お馬鹿でお人好しなだけなのかな」

「そ、それはどういう意味ですか？」

「別に、そのままの意味だよ。ただ、ガードは堅いくせに、悪い男にはコロツと騙されそうだなあって思っただけ。……じゃ、行こうか」

「どこに……？」

「俺の困り事、一緒に解決してくれるんでしよう？」

逃さないとばかりに、怜の手の力が強くなる。

石畳の道を照らす街灯の光が、優しいはずの彼の顔を妖しく歪ませた。

（もしかして、しくじった……？）

背中を駆け抜けた悪寒に、なつきはぶるりと背筋を震わせた。

（なにがどうしてこんなことになってるんだろう……）

一時間後、なつきは駅前にあるホテルの一室にいた。

ブラウンと白で纏められたお洒落な一室には、大型テレビと机、それとダブルベッドがある。なつきはダブルベッドに座り、ガチガチに固まっていた。

BGMなどは流れておらず、ただ、怜がシャワーを浴びている音だけがなつきの耳に届く。

（これは……まさかお持ち帰りをされてしまったんじゃない……）

さあっと血の気が引く。

しかし、次の瞬間思い直した。それはない、と。

怜の困り事が『性欲を持って余している』とかならあり得なくもないが、あれだけの美丈夫だ。処女で、地味で、変な体質を持っているなつきなどを相手にしなくても、掃いて捨てるほど女は寄ってくるだろう。

（お持ち帰りは違うか。怜さんは私の体質についても知ってるわけだし）

怜がわざわざ、なつきを選ぶ理由がどこにもない。

「でもそれなら、この状況は一体……」

そう呟いた時、シャワーの音が止んでいることに気が付いた。

背後に人の気配を感じて振り返ると、ガウンを羽織った怜がいた。

優しさと妖艶さを兼ね備えた彼は、笑顔のままなつきの側まで寄ってくる。

そんな怜から逃げるように、なつきはベッドの端から中心まで移動した。

しかし、追い詰めるほうが速く、なつきは、あつという間に腕を掴まれて、逃げられなくなってしまった。

「つーかまえた」

楽しそうな声に、楽しそうな顔。

腕から感じる彼の体温に、なつきの胸は高鳴った。

「というか、なんで逃げるの？ まだなにもしてないのに」

「いや、怜さんがあまりにもキラキラしていたもので……」

「キラキラ？」

「万年地味子をやつてる身なので、眩しすぎるものを見ると反射的に……」

バーの中も外も薄暗かったのでよくわからなかったが、こうして明るい所にいる怜は、控えめに言つてかなり整った顔立ちをしている。

そんな彼が、ガウンを羽織っただけの格好で目の前にいるのだ。しかも、シャワーを浴びた直後

なので、せつけんのいい匂いもする。

なつきは眩しくて両目が潰れる思いがした。

「うーん。よくわからないけど、嫌われてはいない感じなのかな？ 生理的に受け付けなとか」

「ま、まさか！ 畏れ多いだけで、そういうんじゃないです！」

「畏れ多いって。なつきちゃんって面白いこと言うんだね」

怜は肩を揺らした。そうして口元に笑みを滲ませたまま言葉を続ける。

「まあ、でもよかった。あんまり靡かないものだから、嫌われてるのになつて少し不安だったから」

「靡く……？」

「うん。結構あからさまにアピールしてただけど、もしかして気が付いてなかった？」

「……アピール？」

ぽかんと口を開けて呆けた表情を浮かべるなつきに、怜は「どうりで、手ごたえがないわけだ」とふたたび笑みを零した。

「じゃあ、今後のために覚えておいて。男があんな薄暗い酒場で『話し相手になって』なんて言つて隣に座った時は、大体下心があるから」

「下心……？ え!? 下心!？」

ひっくり返つた声を上げて、なつきは怜と距離を取ろうとする。しかし、腕はいまだに掴まれていて、彼から逃れることは叶わなかった。

近付いてきた彼の身体に、なつきは視線を彷徨さまよわせる。

(し、下心って、やっぱりお持ち帰り!? いやいや! それはない! やっぱりない!!)

怜はなつきの体質の話を終始疑っていた。それなのに『私と一緒にいると、皆眠くなっちゃって。だから私、処女のままなんです』なんて痛いことを言う女と関係を持つとうするのはおかしな話だ。絶世の美女ならいざ知らず、なつきは派手な格好をしていても場慣れしていないと見抜かれるような根っからの地味女である。

固まったままのなつきを、怜はいとも簡単に押し倒す。

そして、恋人のように指を絡ませ、なつきの両手をシーツの上に縫い付けた。

「れ、怜さん!？」

どうせ一分後には寝てしまうのだろうとわかつてはいても、心臓の鼓動が速くなるのは止められない。

怜の肌は、先ほどまで湯を浴びていたせいか湿り気を帯びていて、なんとも言えない艶めかしさだ。

濡れた髪の毛も、どこか淫靡いんぴな雰囲気きを漂わせていた。

なつきは腹に力を込めて声を出す。

「あ、あの、こんなことしていると眠くなっちゃいますよ!」

「眠くなりたいたいんだよね」

「へ?」

「俺、不眠症なんだ」

突然のカミングアウトに、なつきは言葉を失う。

呆然ぼうぜんとする彼女を組み敷いたまま、怜は言葉を続けた。

「実は、今日で三日寝てなくてね。それをなつきちゃんに助けてもらいたいんだ」

その言葉を裏付けるように、よく見ると怜の目の下にはうっすらと隈くまができています。

なつきは強張っていた身体の力を抜いた。

(怜さん、私の体質の話、信じてたんだ)

『眠らせてほしい』と言うのだから、そういうことだろう。

一瞬でも、もしかしてお持ち帰り……なんて思ってしまった自分が恥はずかしかった。

「えっと。つまり私は、自分の体質を利用して怜さんを眠らせればいいんですか?」

なつきが首を傾げると、怜も首を横に倒した。

「うーん。半分当たりで、半分外れかな」

怜は手のひらで支えていた身体を肘ひじで支えはじめる。身体同士の隙間を埋めるように、ぴったりと重なった。

布越しに体温を感じ、なつきは緊張で身体を硬くする。

「俺は正直、君の体質を信じてない。だけど、試してみようかなあとは思っている」

「……つまり?」

「君と五分間このまま添い寝して、俺が眠ったらなつきちゃんの役割は終了。だけど、俺が眠らな

かつたら、もう一つの方法に協力してもらおうかなって」

「もう一つ、とは……?」

「えっち」

「は?」

「セックス」

「はい!!」

なつきは跳び上がる。

渾身の力で怜の腕から逃げ、ベッドの隅に移動した。

しかし、その先は壁になっている。

怜はなつきを追い詰め、腕と壁の間にすっぽりと閉じ込めた。

「なんでそんなにびっくりするの。さっき『下心がある』って言ったじゃないか」

「いや、まさかそっちの『下心』だとは思わなくて!」

「それ以外の『下心』ってなに? 逆に気になるんだけど」

怜は、くつくつと喉の奥で笑う。

彼の余裕綽々な笑みを見上げながら、なつきはできるだけ背中を壁にくっつけて距離を取った。

「そ、そもそも! どうして不眠症をなんとかすることが、そういうのに繋がるんですか!」

「なつきちゃんが処女なのは知ってるけどね。俺はそういうのも、美味しく頂けちゃうタイプだし」

「そんなことは今聞いてないです! 私は、なんでそういう行為をすることが不眠症解消と繋がる

のかって話を……っ!?」

狼狽えるなつきを見下ろしながら、怜は困ったように微笑んだ。

「実はね。女性と身体を重ねれば、その後は多少は寝れるんだ。……と言っても、二、三時間連続で睡眠が取れるぐらいだけど」

「二、三時間?」

「そう。たいしたことないでしょう? でも、これをしないと大体一時間おきに目が覚める。酷い時は三十分かな? もっと酷い時はここ数日みたいに一睡もできない。自然入眠も、運動も、薬も、全部効かなくなった最後の手段がこれ。どう? 協力してくれない?」

怜の口調に必死さはないが、それが本当なら大変なことである。

三十分おきに目が覚めるというのは想像しただけで頭が痛くなってくるし、まったく眠れないのなんて論外だ。

怜の話聞き、なつきは、はっと顔を上げる。

「もしかして、今日はそういうことをする女性を探しに、あのバーに行っていたんですか?」

「ん、まあね。あんまり多用はしたくない方法なんだけど……」

恋人はいないからね。と笑う怜に、なつきは視線を彷徨させた。

怜の不眠症のことは大変だと思おうし、助けてあげたいとも思う。

自分のこの体質がなにかの役に立つだなんて思っていないから、求められただけで嬉しいとさえ感じてしまう。

けれど万が一、億が一、怜が『寝ないほうの人』だったら……
その可能性が頭をよぎり、なつきの頬はじわじわと熱くなっていく。

「えっと……」

「別にこれからずっと付き合えてわけじゃないし、今晚のことをネタに脅そうと思ってるわけでもないよ？ 本当に一夜限り。ワンナイトラブ。それに、なつきちゃんだって俺が寝なかったほうがチャンスなんじゃない？」

その瞬間、怜の長い指がなつきに触れる。

髪を耳にかけただけなのに、緊張で強張っていた身体は大きく跳ねてしまった。

「——っ！」

「俺なら、優しく教えてあげられるけど……」

そう耳元で囁かれて、体温が一気に上昇する。

あまりの熱に、脳が溶けるような心地がした。

囁かれた耳を押さえながら、なつきは必死で顔を繕った。

「私が、どっちも協力できないって言ったたらどうするんですか？」

「完徹四日目に突入かな？ 身体もしんどくなってきたし、そろそろ倒れる頃合いじゃないかな」

その言葉は、なつきに罪悪感を抱かせた。

(怜さんが寝ない人なわけじゃないんだし、添い寝ぐらいなら……)

そう思いつつも、心の片隅で彼が寝ないことを危惧する自分もいた。

チャンスであり、ピンチであるこの状況に、なつきの心は揺れる。

しかし、辛そうな怜を前に、とても『NO』とは言い出せなかった。

「どう？ 俺の睡眠薬になってくれる気はない？」

その優しい微笑みに、なつきはゆっくりと一つ頷いた。

「じゃ、まずは添い寝からだね」

怜はそう言い、布団の中でなつきを抱きしめた。

向き合うのは恥ずかしいというなつきの希望により、うしろから抱え込まれるような形で身体を

密着させている。

布団に入るということで、なつきは先ほどシャワーを浴びてきた。

怜とお揃いのガウンが気恥ずかしく、なんだかそわそわと落ち着かない。

「さつきは適当に五分って言ったけど、そのぐらいでよかった？」

「いえ。五分で十分だと思います。普通は一分もかからずに寝ちゃうので」

「そっか。でも念を入れて十五分間目を瞑ってみようか。それでダメなら、もう一つの方法だね」

「わ、わかりました」

もう一つの方法、その言葉に声引き攀った。

なつきは暴れ回る心臓をガウンの上からぎゅっと掴む。そして目を閉じ、深呼吸をした。

自分が落ち着かなければきつと怜も落ちつくことができなだろうという、彼女なりの心配りで

ある。

(大丈夫、すぐに怜さんは寝る！)

今まで、彼氏から同級生、さらには友人のペットまで寝落ちさせてきた。通用しないわけがない。それから十五分間、なつきは目を閉じたまま怜が眠りに落ちるのを待った。

——しかし……

「怜さん、寝てませんよね？」

「うん。寝てはいかな」

怜は一向に寝る気配を見せなかった。

返ってきた声も、先ほどと同様元気だ。

なつきはぐるりと身体を反転させると、怜の顔を見上げた。涼しげな瞳は、じつとなつきのことを見つめていた。

「……もしかして、ずっと目を開けてました？」

「いや、瞑^{ぼくろ}つてたけど。というか、なつきちゃんの体質って俺が目^めを瞑^{ぼくろ}つていようが開けていようが関係ないって話じゃなかった？」

「そ、そうなんですけど……」

なつきは視線を彷徨^{さまよ}わせた。正直、こんな状況は初めてで、どうしたらいいのかわからない。

狼狽^{うろた}えていると、怜の手のひらがなつきのガウンの合わせ目からするりと入ってきて、背中をくすぐった。

「ひゃー！」

「それじゃ、もう一つの方法に協力してもらおうかな？」

どこか楽しそうに怜は笑う。指で円を描きながら背中を撫^なでられて、なつきの肩は跳ね上がった。ゾクゾクと背中をなにかが駆け上がり、思わず怜に縋^{すが}りつく。

「ん。大丈夫。優しくしてあげる」

まるで子供をあやすように声を落とし、怜はなつきの額^{ひたい}にキスを落とした。

そこから熱が生まれて、一瞬で全身の血液が沸騰^{かき}しそうになる。

背中をまさぐる手のひらに、なつきの身体は小刻みに反応した。

(こ、このまま私、一線越えちゃうの!?)

未体験な事柄に挑む恐怖と、優しい手のひらから感じる少しの安堵^{あん堵}。

そして、胸の奥からせり上がるわずかな興奮。

いろいろな感情がせめぎ合い、頭が混乱した。

しかし、嫌ではなかった。

なつきとしても処女は捨てたいと思っていたのだ。

しかも、怜なら初めてのなつきに合わせて、きつと優しくしてくれるだろうという確信もある。

けれど……

(でも、私と寝ても怜さんって二、三時間しか連続で寝れないんだよね……)

なつきが知る限り、自分の体質で眠りについた人は八時間以上余裕で寝てしまう。普段睡眠が短

いと言っていたトモだって、なつきと一緒に寝れば、目覚まし時計の音に気付かないぐらい熟睡している。

それならば、怜だって自分の体質によって眠ったほうがいいだろう。

そのほうが、ゆっくり睡眠が取れるのかもしれない。

なつきは、そう考えた。

「ちよ、ちょっと待つてくださいー！」

いつの間にか首筋に顔を埋めていた怜を、渾身の力で押しつける。

怜はびっくりしたように目を瞬かせていた。

「もう十分、時間をください！ 頑張つて怜さんを寝かせてみせるので！」

「……十分でも、三十分でも、いくらでもどうぞ」

ふっと、困ったような笑みを浮かべて、怜は身体を離してくれた。背中を撫でる手も、ガウンから引き抜かれる。

離れていってしまう熱が、少し寂しかった。

そんな感情に頭を振って、なつきはぎゅっと怜の手を握った。

そして、温めるように息を吹きかけ、摩る。

「なにをしているの？」

怜は不思議そうな声を出す。

「前にテレビで専門家の人が『眠れない時は手足を温めるといい』って言っていたので、温めてる

んです！ 怜さんは目を瞑っていてくださいね。気持ちも身体もリラックスさせてください。すぐに眠たくなると思うので！」

「……必死だね」

「だって、寝れないのって辛いじゃないですか。私には不眠の経験はないですけど、一日徹夜しただけで辛いですもん。だから、怜さんはもっとしんどいんだろうなあって」

「俺のため？」

「他になにがあるんですか？」

なつきが首を傾げたところ、怜は大きく目を見開いて固まっていた。

「私の体質で眠った人って、眠りが深いみたいなんです。だから……」

は、と手のひらに息を吹きかけると、頭上で怜が笑う気配がした。

見上げると、眉根を寄せつつも口元には笑みを浮かべる彼の姿。

「なんか、最高に悪いことをしている気分だ」

「……よくわからないです」

「俺は、君の処女を捨てたいっていうのにつけ込んで、自分のために君をいいようにしようとしてるんだよ？ よくそういう男の身を案じられるよね」

「だって、それは……」

その指摘に、なつきは言い淀む。

怜は自分だけがエゴによって行動しているように言うが、なつきにも下心がないわけではない

のだ。

怜は冷静な瞳でなつきを見つめる。

「本当は嫌なんでしょう？ だから『もう十分時間がほしい』なんて言ったんじゃないの？」

「ち、違いますよ！ 時間がほしいって言ったのは、怜さんに私の体質で安眠してもらいたかったからで、怜さんとそういうことをするのが嫌ってわけじゃ……」

「好きな人がいるのに？」

「……好きな人がいるからです」

恥ずかしくて瞳が潤んだ。

好きな人がいるのに、他の男性と身体を繋げるのは平気なのかと咎められたような気分だ。

なつきだって、処女を捨てられるなら誰でもいいと思っていたわけじゃない。だけど、怜にはそう見えてしまうのも頷ける。

俯いたなつきの顔を怜の手が優しく上げさせる。

そして彼は、申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「ごめん。今の質問は意地悪だったね。なつきちゃんだって、そりゃ最初は好きな人がよかったよね」

目尻に溜まった涙を吸い取るように口づけられる。

なつきが摩っていた手を引き抜かれ、肩を掴まれた。

そして、そのまま両肩を押さえつけられ、押し倒された。

「優しくするね。本当に優しくする」

「えっと……」

「ごめん。もう自然には寝れないかも」

怜はぴったりと身体を密着させてくる。すると、なつきの太股に硬いなが当たった。ぐりつ、と太股の柔らかいところを押すそれに、なつきも見当がついた。

「……っ！」

「いっ？」

耳元で囁かれる声に、なつきは頷く代わりに彼のガウンをぎゅっと握りしめた。

怜は肩口に顔を埋め、ちゅ、ちゅ、と首筋に口づけをする。

そのたびになつきの身体は強張り、怜をぎゅっと抱きしめた。

「嬉しいけど、そんなに抱きしめられたら動けないよ」

「だって……」

なつきは泣きそうな声を出し、唇を噛みしめた。

初めてのことなので、どうするのが正解かわからないのだ。

身体を硬くしていないと、ちょっとした刺激で跳ねてしまいそうになるし、あられもない声が出てしまいそうになる。

なつきの表情で理解したのか、怜は長い指でなつきの唇をなぞり、安心させるように微笑んだ。

「そっか、なつきちゃんは初めてだもんね。じゃ、ゆっくり教えながらいくよ」
「お願いします」

律儀に頭を下げるなつきは怜はふっと笑い、額同士をびったりとくっつけた。

「まず、キスからしてみようか。なつきちゃん、キスの経験は？」

「少し……」

「ん、そう。じゃあ、どのくらい慣れているのか確認」

まずは唇を合わせるだけのキスだった。

小鳥が、えさを啄むような優しいキス。

なつきは怜に応えるように、何度も唇を差し出した。

「ん、これぐらいは余裕だね。じゃあ、次はどうかな」

「んっ」

唾液が混ざり合うような深いキスが落ちてきた。

唇の柔らかい感触が、先ほどよりもしつかりと伝わってくる。

まるで味わうように何度も吸われて、甘く噛まれた。

そのたびに鼻にかかった声が漏れてしまう。

「んっ、あ」

「これぐらいで音を上げてたら、先がもたないからね。頑張って」

怜は頤を掴み、なつきの口を開かせた。そして、次は舌をねじ込んでくる。

「あっ、や……」

怜の舌は、なつきの口腔内をかき混ぜた。

舌と舌が絡まり、くちゅ、という卑猥な音が耳に届く。

擦め取られた舌はいつの間にか怜の口内に誘い込まれていて、お互いの唾液を交換するかのよう
にうごめいた。

「ん、んん、あ……」

「ほら、もうちょっと大きく口を開けて。舌を出して」

蕩ける声になつきは従い、口を開けて舌を出した。

「ん。いい子」

怜は妖しく微笑み、自身の上唇を舐める。

そして、まるで食べるようになつきの唇に噛みついた。

歯は立てていないけれど、激しく舌を吸い、口の中を味わっている。

「んっ、んんっ、あ、ああっ」

最初のキスのように応えることなどできなかった。

ただただ翻弄され、呼吸だけはしようともがく。

怜はそんな乱れていくなつきを見ながら、楽しそうに目を細めていた。

「……なつきちゃん、可愛いね。あんまりにも可愛いからいじめたくなっちゃうけど、今日はダメ
だね」

「れい、さん……?」

「優しくするって言ったからね。約束は守るよ」

とろりと蕩けた顔をするなつきに、怜は喉仏を上下させた。

怜はなつきの身体に指を這わせ、ガウンを開いた。

そして、ブラジャーの真ん中を人差し指で持ち上げる。

「これ、邪魔だね。取るよ」

そう宣言するや否や、手をうしろに回し、あつという間に下着のホックを外してしまう。

人より少し小さめな二つの丘が、白い大地の上で大きく揺れた。

「ひゃっ!」

いきなり晒してしまった両胸を、なつきは必死に隠す。

心臓がこれでもかと跳ね回り、胸を突き破ってしまうかというほどだ。

怜はなつきの手をやんわりとどかし、なつきの胸を手で揉みだいた。

「ん」

「柔らかい」

率直な感想に、顔から火が噴き出そうだった。

怜は揉むと同時に爪を立て、赤い先端を引つ掻く。

そのたびになつきは、あられもない声を上げた。

「あ、あ、ああ」

気が付けばもう一つの乳房は怜に吸われていて、それがまた快感を呼び起こす。

下半身がじゅくじゅくと熱を持ち始め、なにかがどろりと零れ出るような感触がした。

「うん……」

「ほら、下着の上からでもわかるぐらい悦んでるよ」

怜の指が、下着の上からなつきの秘所を撫でた。

「はあう!」

初めての刺激に、なつきは首をすくめ、腰を引いた。

しかし、逃がさないとばかりに怜は腰を掴み、自らのほうに引き寄せる。

そしてなつきの足を割り、身体を滑り込ませた。

「本当になにも知らないんだね。ここを自分で触ったこともないの?」

「ない、です」

下着の上から怜は、何度もなつきの下の口を指で擦った。

ピリピリとした刺激が、電気のように全身を駆け巡る。

なつきは変な声が漏れないようにと自分の口を押さえたまま、必死にその刺激に耐えていた。

「ん、んん、ん……」

「その割には感覚がいいみたいだね。びちゃびちゃだ」

怜はなつきのそこから手を離し、彼女に見せつけるように広げてみせる。

指と指の間には透明な糸の橋が架かっていた。

このどろどろの粘着質な液体が自分の身体から出たのだと信じられず、なつきはぎゅっと目を瞑った。

激しくはない行為だが、優しすぎて逆に卑猥に感じてしまう。

「下着がぐちゃぐちゃだね。もう脱ごうか。意味ないし」

「や、やだ！」

未知への恐怖に、なつきは両手で下着を押さえた。

潤んだ瞳を怜に向けたところ、彼は額に唇を寄せた。

「ん、じゃあ、穿いたまましようか」

怜は下着を横に避け、そこから指を差し入れてくる。

彼の指は、くすぐるようになつきの入り口を撫でた。

なつきはシーツを掴み、首をいやいやと振る。

「ちが、そういうことじゃ……」

「わかっているよ。なつきちゃんは下着を脱ぐのが嫌ということじゃなくて、これ以上進むのが怖いってことだよ」

なつきは何度も頷いた。

このままでは自分も知らない自分が姿を見せて、身体を乗っ取られてしまいたいそうだった。

あられもない姿を晒し、上げたくもない声を上げてしまう。

「でも、ごめん。それは無理」

「や……」

ちゅく、と指の先が割れ目の中に侵入してくる。

まだ入り口のところで、彼は何度も往復させた。

「ごめんね」

「や、あ、あ、ああ……」

頭の芯が熱くなり、なつきは抵抗できなくなっていた。

足にはもうあまり力が入らないし、シーツをきつく掴んでいた手も、今では開いてしまっている。

「やあん。こわい……」

「なにが怖いのか？ 俺？」

なつきは首を横に振った。

生理的な涙が瞳に浮かぶ。

「いっぱい変な声が出ちゃうから——っ！ ひゃうんっ」

怜の太くて長い指が、遠慮なくなつきの中に入ってくる。

ずんずんと進んでくる中指に、なつきは腰を上げた。

「や、だから。れいさあ……んんっ！ あん！」

「ん。声、いっぱい出していいよ」

長い指が一本、最奥まで入る。そして、ぐりぐりと内壁を撫でられた。

そのままゆつくりと出し入れを繰り返す。

「しつかり慣らさないとね。痛いのは嫌でしょ？」

「あ、ああ、ああ、あ」

「少しずつ広げられる秘園に、もうなにも考えられなくなっていく。

「すごいね、もうトロトロだ。これなら、すぐに二本目の指を入れられるかな？」

「うあつ……」

今まで誰も迎え入れたことのない隘路あいろを押し広げられ、なつきの息は詰まる。

しかし、撫なでられていくうちに、圧迫感も痛みも少しずつ消えていく。

その後からやってくるのは、なにも考えられなくなるほどの浮遊感だ。

これが快感というやつだろうか、なつきは頭の隅で考えていた。

「中は確かに狭いけど、こんなに感じるなんて。意外にえっちなんだね、なつきちゃんは」

「ちが……。これは、怜さんが……。あつあ……。」

「俺のせい？ それなら、なおさら嬉しいね」

怜はなつきから指を引き抜き、ガウンを脱いだ。

均整の取れた筋肉質な肉体が露あわになり、なつきの視線は、思わず釘付けになる。

「なつきちゃんって、やっぱりえっちだね」

視線に気が付いた怜が、冗談冗談ほくそう言う。

なつきは両手で顔を隠し、「ご、ごめんなさい！」と声を上げた。

「冗談。いいよ見て」

なつきの顔を覆おほう両手を取り、怜は自分の胸に這はわせる。

「これが今から君を抱く男の身体だよ」

触れた肌の感触に、全身から火が出そうになった。

怜はショーツ姿のなつきを、ぎゅっと抱きしめる。

「あったかい……」

なつきの染み入るような言葉に、怜は笑みを零した。

「どう？ 少しは安心した？ 人の体温っていいものだよね」

「……怜さんって、優しいですよね」

「優しく抱くって約束したからね」

約束をしていなくても、怜はきつとなつきを優しく抱いてくれただろう。

そう思えるほどに、彼の行動は一つ一つが温かい。

「あと。これからは優しくできないから、今のうちに優しさを堪能たんのうしといて」

「え？」

「三本目の指が入ったら、最後までするから」

怜はなつきから身体を離し、膝を立てさせた。

そして、その間に顔を埋うめ、ショーツの上から秘所秘所を舐なめる。

「ひゃっー」

「やっぱり邪魔だね。取るよ」

怜はなつきのショーツを取り払い、ふたたび足の間に顔を埋めた。

「や、やめ……」

「やめない」

茂みをかき分け、怜は舌先を中心に埋めた。

「ああっ！」

そのまま指と一緒に、中をぐちゃぐちゃとかき混ぜ始める。

先ほどまでの気遣いとは無縁な行為に、なつきは怜の頭を掴んで首を振った。

「や、はげし、ああっ、あっ、あんっ」

怜は無言で蜜壺を攻め立てる。

じゅっじゅっ、と蕩け出た液体を吸われ、なつきの羞恥は最高潮に達してしまう。

「はずか……やあっ！」

曲げられた二本の指が内壁のいい所にあたり、なつきの身体は跳ねた。

首を反らして快感を逃すと、彼女の足元で怜が笑う。

「ここがいいんだ」

その低い声に、背筋が粟立った。

知られてはいけない人物に、己の秘密を知られたような危機感が全身を包む。

「あ、ああ……」

「とりあえず、一回イッておこうか」

妖しく笑う怜は、そのままそのいい所を重点的に攻めだした。

押して、撫でて、かき混ぜて、引っ掻く。

卑猥な水音と翻弄されるなつきの嬌声だけが部屋に響き渡る。

「ああっ、あ、やあ、あんっ」

「もっと刺激がほしいの？ 腰が動いてるよ」

「ああ……」

恥ずかしくて顔を覆いながら、なつきは喘いだ。

びちゃびちゃになったシャツが冷たく臀部を濡らす。

「ああ——！！」

怜の唇がなにかを吸った瞬間、なつきの視界が真っ白になった。

全身が一瞬にして強張り、身体が小刻みに震えた。

達したのだ。そう理解して間もなく、なつきの意識は深い暗闇に落ちてしまった。

なつきが目覚めた時には、もう太陽が高く昇っていた。外では早朝を告げるように小鳥がさえずっている。

身体を起こし、部屋を見渡す。見覚えのない部屋に、なつきは首を捻った。

「あれ、ここ……どこだっけ……？」

呟いた直後、隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。その音につられて、なつきは隣を見る。そ

うして、固まった。

なつきの隣には半裸で眠る、美丈夫びじょうふがいた。窓から差し込む日の光を浴びて、色素の薄い茶色の髪がキラキラと輝いている。

「ん」

気持ちよさそうに寝返りをうつ彼の身体は、細いながらも筋肉質だ。

それを見た瞬間、なつきは昨夜の情事を思い出す。

一瞬にして頭の中を埋め尽くすピンク色の思い出に、彼女の頬はボン、と赤く染まった。

(き、昨日は……、あっ！ 私、途中で気を失っちゃったんだ！)

なつきの身体にあまり違和感はないし、怜もボクサーパンツは穿はいたまま寝ているので、意識がない自分を彼が無理やり……ということはなかったようだった。

なつきは彼の髪を梳すく。

さらさらの髪の毛はなつきの手から落ち、頬を滑っていった。

そうやって触っても起きないぐらいに、彼は熟睡しているようだった。

「怜さん、ちゃんと寝れたんだ。よかった」

結局、先になつきのほうが気絶してしまったので、彼が自分の体質によって寝たのかわからないけれど、どちらにせよ彼は安眠できたのだ。その事実が嬉しかった。

なつきは怜を起こさないようにベッドから降りると、シャワーを浴び、帰り支度を始めた。

最後までできなかつたので心残りがあるものの、彼ははっきりと昨夜『ワンナイトラブ』だと宣

言していたのだ。きつと次はない。

(今まで男性と同じ布団にも入れなかつた私が、ここまでできただけでも、一歩前進よね。それに……)

「怜さんが寝れたなら、いいか」

なつきはほっこりと笑い、「おやすみなさい」と囁いて部屋を後にした。